

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金

企画研究プロジェクトⅡ(教員・学生参加型) 2015年度研究成果報告書

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏名
	スポーツウエルネス学科・4年	吉田 茉莉
指導教員	所属・職名	氏名
	スポーツウエルネス学科・助教	安藤 佳代子
研究課題	ゴールボール教室を通じて、障がい者スポーツの普及と活性化を図る。	
プロジェクト 分担者	秋山 慧介・浦野 雄也・大森 友斗・加藤 唯奈・堀内 空	

プロジェクトの内容及び成果の概要

1. 目的・概要

2015年12月11日(金)、18日(金)新座市立東北小学校にて、4年生の児童約125名を対象にゴールボール教室を開催した。ゴールボール競技は、鈴の入ったボールや、コートライン下に貼ってある紐を探る触角を頼りに、自分の意志だけで動くことができるという特徴がある。また、ルールも比較的分かりやすくアイシェードを装着すれば誰もが体験できるスポーツでもあることから、小学生を対象としたゴールボール体験教室を企画した。

体験を通じて障がいの理解と交流を深め、ゴールボールを含む障がい者スポーツの普及・活性化を目指すことを目的とし実施した。また、小学生を対象としたことで、競技の普及を図るだけではなく、子どもたちの身近にあるスポーツを切り口として「障がいのある人＝特別な人」という無意識のうちにつくってしまう「心のバリア」を取り除いていくことや、2020年の東京オリンピック・パラリンピックへの興味関心を引き立てることのできるような活動を目指した。

2. 実施内容

事前準備として、小学校側への内容説明及び日程調整、講師の依頼、笹川スポーツ財団の方々と事前学習資料に関する打ち合わせ、事前学習の資料作成、アンケート作成、指導案作成、講師との内容打ち合わせ、備品準備などを行った。

1クラス45分間という限られた実施時間の中では目的を達成するのは難しいと考え、視覚に障がいのある人のスポーツ実施状況や障がい者スポーツに関する理解を深めるため座学形式での事前学習の時間を別日に10分間設けた。事前学習では、学生自ら講師となりクイズや小学生との対話を交えながら説明を行った。

体験教室では、元ゴールボール日本女子代表ヘッドコーチの江黒直樹さん、日本代表選手の安達阿記子さんを講師にお招きし実施した。導入として試合の映像を観た後、実際にアイシェードをつけて歩く、ボールを転がす・止めるという基本動作を確認し、学生の指導のもとグループごとに基礎練習を行った。その後、ゲームを実施したが、思ったように真っ直ぐ投げられなかったり、周りの状況が分からないためアイシェードをすぐに外してしまったり「目が見えない」ことを実感している姿が印象に残った。

3. 成果・考察

体験教室前後にアンケートを実施し、障がいの理解や2020年の東京パラリンピックへの関心度の変化について調査した。「かわいそうな人」「生活するのが難しい」などの障がいに対するイメージや、会場でパラリンピックを直接観戦したい人の割合が1割近く増加するなど多くの項目で肯定的な変化が見られた。このような障がい者スポーツへの理解や関心、認知度を高める活動をこれから2020年に向けて積み重ね続けることが大切だと感じた。